

モンゴル族のオボー研究と今後の課題

ナモジラ
那木吉拉著※ 白莉莉訳※

モンゴル族のオボー研究はもはや百年の歴史をもち、しかも日本人研究者が先立ってオボーに関連する研究や民族誌的な記録を記し残した。しかし、中華人民共和国の樹立することをきっかけとし、国内外ではオボーにおける研究動向が一時的に切断された状況に入ったのである。後の20世紀80年代の改革開放政策以来、国内におけるオボー研究も新しいステージに上がり、著しい成果を遂げている。研究状況からみたと、様々な分野で幅広く研究されているが、不足なところがまだ数多く残っている。そのため、今後の課題は主に実地調査をもとに、一次資料を収集し、特定の研究を組み立て、オボー文化の研究を一定のレベルに引き出すことである。ある程度、草原文化はオボーにより具現されており、オボーへの保護及び、発展が草原文化への保護と発展を意味するのである。それゆえ、『内蒙古草原文化保護発展基金会』はオボーの研究項目において誘導的な役割を果たすべきだと思う。

キーワード: オボー文化 回顧 プレビュー

オボーはモンゴル、エウンキ族（鄂温克族）、ダウール族（達斡尔族）、ユゲル族（裕固族）など北方民族の伝統的な文化で、北方民族の中で長い間伝承されて、特殊な生命力と影響力を持っている一つの文化現象であり、遊牧民族の多種文化のキャリアーである。それゆえ、オボーの研究はある意味では草原文化の研究であり、オボーの研究を通して、草原の遊牧民の自然と生態に対する意識を考察できる。

既述したようにオボーに対する注目は百年くらいの歴史を経て、最初日本人の研究者に先立って深い興味を寄せられてきたのである。オボーを通してモンゴル族の文化を理解できると思っていた彼らは、次々にモンゴル地方を訪れて、フィールド調査を行ない、研究を進めていた。その中で、柳田国男はかつて「日本十三塚とモンゴル族のオボー」¹⁾を書き、比較研究の視点を表していた。モンゴル族のオボーに触れて、その研究を行なった後藤富雄は前世紀初頭ころに「モンゴル族におけるオボーの崇拜—その文化における諸機能」²⁾という論文を発表し、オボー及びその祭祀において、宗教的役割や伝統的あり方について論じている。その後、秋葉隆は「朝鮮の民俗に就いて—特に満蒙民族との比較」³⁾と「オボーとオボー祭り」⁴⁾を著し、それぞれ異なる視点からモンゴル族のオボーを観察し、研究を行なったのである。日本民俗学者大間篤三

※著者：中国・中央民族大学蒙古语言文学系教授

※訳者：神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科研究生

は前世紀40年代に『満州民族学会会報』に「オボー調査の要項」という一文を発表して、オボー調査について40項目を提出しており、それはオボー研究において、調査を行なうには手引きとなる重要な指摘であった^v。オボー及びその祭祀における起源については、日本の研究者に濃厚な興味を持たされてきていて、その中で、江上波夫の「匈奴の祭祀」が代表的な著作であって、モンゴルなど北方民族のオボー信仰を匈奴時代まで遡って、概観している^{vi}。

モンゴルのオボーにおける研究は日本のみならず、ヨーロッパにも注目されてきた。その中で、ブリヤトのドルジ・バンザロフの『黒教或ひは蒙古人に於けるシャーマン教』^{vii}には、モンゴル族のオボーの性質について論じて、これはオボー信仰に見られるシャーマニズム的な要素に触れた最初の模索になったといえる。韓国の孫晋泰の『朝鮮の石壇と蒙古のオボー』は、朝鮮族の石壇と蒙古のオボーについて比較研究した優れた論文である。1935年清華大学のUrquhart教授は蘇尼特右旗のオボー祭祀を参与観察して、それに基づいて「蘇尼特右旗のオボー祭祀」^{viii}を発表した。この論文について陳崗龍博士は「当時作者はただ蒙古文化に興味のある外国人旅行者の視覚から見聞を記録したもので、(省略)、なるべくオボー祭祀活動の全ての過程を記録しようとした。(省略)、これは今日われわれのオボー研究とそれにかかわる民俗学に対しては貴重な資料になっている」と、指摘したのである。

国内の研究者はオボーを注目し、民俗誌的に記録しはじめたのは、前世紀十年代のことである。ロブサンチョイダンは『蒙古風俗鑑』^{ix}にオボーの起源について触れて、当時の内モンゴル東部のオボー祭祀の活動状況を記している。更に、清末及び中華民国時期からモンゴルでの社会変容のオボーに対する影響などを記述して、東部モンゴルのオボー祭祀の衰退した原因になった点を指摘している。その以降、国内のモンゴル人の中でオボーに関心をもつ研究者が少なくなり、特に新中国成立以後、オボー祭祀は封建迷信的のものであると排除されたため、民衆の中で、オボー祭祀活動が禁止されただけでなく、オボーにおける研究も拒否されたのである。同時に、中国と外国の自由交流が制限されて、外国の研究者が国内における現地調査と文献の参考も禁止されるようになった。かくして、外国でのオボー研究の学術進呈は停滞状態に入ったにもかかわらず、全ての民間文化の研究も廃棄されたのである。

前世紀80年代に入ると、伝統文化に対する社会的保護と発展についての認知の高まりに従い、伝統文化の復活及び調査研究活動がブームになり、オボー関係の内容も民俗習慣に対する収集整理の書物に多少記されるようになったのである。例えば、『蒙古族民俗シリーズ』（内蒙古人民出版社）及びその他の民俗的書物の中で、オボー祭祀及びオボン・ナイルObon・Nairについての内容が欠かすことなく収録されている。更に、各地のモンゴル語雑誌を主として、オボー関係の文章の掲載は増えつつあり、『内蒙古日報』、『オールドス報』、『アラシャ報』、『フルンベイル報』、『赤峰報』など地方の雑誌などにも、オボー及びその祭祀の紹介がしばしば見えるようになった。近年、復元により、国内におけるオボー調査が盛んになり、オボー関係の資料を収集した書物も数部出版された。例えば、アルビンバイルとソナムの共著『鄂托克敖包』^xと、ラ・アムルメンの『ウジュムチンオボー祭祀』^{xi}のような書物が民族誌的資料として挙げられる。

上述したような整理や記録はオボーへの保護と発展においては、見落としてはいけない役割を果たしている。特に地方研究者が長年農村、放牧地区で暮らして、数多くのオボー祭祀に参加し、その経験の基で、大量の一次資料を収集し記録してきたのである。そのため、彼らによって収集された資料はオボーの復元や普及、更に保留に貢献になったばかりではなく、オボー研究に豊富な資料を提供しているのである。一方、これらの著者は本格的な民俗学・人類学的調査方向を持たず、各々の見聞や経験を元来のままで記録しただけである。そのため、フィールド調査資料とは違って、系統性や完備性が乏しい側面もあるに違いない。

国内の学术界がオボーを注目し始めたのは、文化大革命が終わって、改革開放政策が実施し始まった時からのことであった。その時期から国内の蒙漢刊物にオボー関係の研究論文が載せられつつ、オボーにおける概観や解明に努めているにもかかわらず、学術的なレベルも著しい成果を遂げている。これまでの研究を概括してみると、以下のような三つの面でまとめることが出来る。

まず、オボー及びその祭祀の起源と祭礼の本質について注目され、論じられている。劉文鎖と王磊合の「オボー祭祀の起源」^{xii}、ソルタイ（蘇日台）の「オボーの形成及び変遷について」^{xiii}、仁洪生の「モンゴル族のオボー習俗の文化淵源における考察」^{xiv}、金剛の「オボー祭祀の実質について」^{xv}、ナムジラドルジ（那木吉拉道爾吉）の「モンゴル族のオボー祭祀について」^{xvi}などが挙げられる。

次にオボーの区域特色研究もこの時期に見られ、オボー研究においては一つの特徴になっている。その中で、波・少布の「黒竜江流域のモンゴルにおけるオボー考察」^{xvii}と「嫩江流域のモンゴルにおけるオボー考察」^{xviii}、何日莫其と呉宝柱の「東部モンゴル地区の記念オボー」^{xix}、呉金鳳の「モンゴル貞十三オボー及びそれに見られる民族性特徴」^{xx}、巴・巴図の「喀刺烏蘇土尔扈特オボー習俗の考察」^{xxi}、其日満図の「ウーシン旗の十三オボー及び周囲のジャングル」^{xxii}、納琴の「オボー信仰の役割及び伝説—珠拉沁村のフィールド調査研究」^{xxiii}、エルヘムバラル（額爾根巴乙拉）の「ホルチン（科爾沁）オボー崇拜習俗及びその起源」^{xxiv}などが挙げられる。これらの論文は主に内モンゴル東部地域と新疆オイラドモンゴル、オールドスモンゴル地域のオボーについて考察したものである。

最後に、モンゴル族におけるオボー研究は比較研究の分野で行なわれ、モンゴル、漢族、チベットの研究者らが、三つの民族の間に比較してみる立場を取っている。例えば、馬昌儀の「オボーと瑪尼堆の象徴の比較研究」^{xxv}、荊莉、金錦子の「オボーと社郎堂の比較研究」^{xxvi}、拉巴次旦の「瑪尼堆とオボーの起源について」^{xxvii}、陳緯の「チベット族のオボー祭祀について」^{xxviii}などが挙げられる。

以上のような民族誌資料と研究報告によると、モンゴル地区には氏族オボー、家族オボーと各種の盟旗のオボーのほか、女性オボーと子どもオボーなどもある。こういう特殊なオボー及びその活動特徴に関心を持っている研究者も少なからずいる。波・少布の「モンゴル族の女性オボーの特徴」^{xxix}と何日莫其の「モンゴル族の婦女オボーの源を探る」^{xxx}が注目されるべきで

ある。

近年、北京大学の若手研究者陳崗龍はオボー及びその祭祀に関心を寄せ、何年前からオボーに対して注目し、学会で口頭発表をしたことがある。彼は大学の『東方文化』講義で「オボーの象徴と文化の特徴」という課題を授け、学生の劉迪南に「蘇尼特右旗のオボー祭祀」を訳してもらい、『西北民族研究』に載せたのである。2002年中央民族大学蒙古言語文学専攻の成立50周年のシンポジウムで「オボー研究史に対する配慮」というテーマで発表し、2007年オールドス市ウーシン旗で開いた『中国スウルデ文化、オボー文化、馬文化』のシンポジウムで「オボー研究の方法と資料準備」というテーマで発表し、主にオボー研究の方法と資料準備という両面から自分の観点を述べ、研究者の注目を惹いたのである。同シンポジウムでは筆者の「オボー祭祀の起源に対する配慮」と王其格の「祭壇とオボー起源」など、オボーにおける研究発表が多少見られている。

文化大革命が終焉し、中国はようやく安定した雰囲気、改革開放の新時代を歩み、各民族の文化交流も盛んになり、民族の伝統文化への重視も高まってきた。したがって、オボー文化とオボー祭礼も復活されてきたのである。しかし、国内の研究状況からみると、オボーにおける研究の勢いは未だ初期段階に留まった状態である。これに対して、日本での研究成果は著しく、既に参与調査に基づいた論文が続々と載せられている。例えば、早稲田大学の吉田順一は内モンゴル東部でフィールド調査を行ない、「近現代内モンゴル東部地区のオボーの歴史」^{xxx}を掲載したのである。この論文では地域の社会変革とオボーとの関係に焦点を置き、近年変遷しつつあるオボー祭祀の動因について詳細に記述している。

モンゴル族のネイティブ研究者のオボーにおける研究は、何十年をぼちぼちと歩んできており、一定の業績に達したが、オボーについては人類学的な民族誌資料やフィールド調査としてまとまったものが不足である。データと資料の不足はオボー研究の進行に影響をもたらしているのである。そのため、研究者らの提出している起源説、境界標識説、祖先崇拜説、祭壇説など様々な説は説得できるほどいけなく、オボーの本質を解明しにくい状態にある。日本やチベットのような国や民族にもオボーと類似している現象は存在しているし、その点を既に意識した国内外の研究者らは、比較研究の視野から較べて著した論文が掲載されて、オボー研究を通して、文化のグローバリゼーション化が進められている。

民族誌的資料はまだ纏まっていないからこそ、モンゴル族のオボー、シャーマニズム、チベット仏教などについての研究は期待ほどの成果に上がっていない状況で、オボーの起源についての課題に触れるたび、シャーマニズムと関連付けるのが多い。実際、オボー造営の場所の選定、祭礼の司祭などがラマ僧によって行われ、オボー祭祀に唱えられている経文もチベット文で書かれており、モンゴル語の経文が非常に少ない。多くの研究で提出されている通り、オボー信仰はシャーマニズムと深く関わっているとすれば、如何にオボー信仰に含まれているチベット仏教的な要素を取り扱い、シャーマニズム的な要素を明らかにすることができるかという点も複雑であり、オボー研究においてはチベット仏教的な要素が否定できぬと言わざるを得な

い。

その他、近年われわれがモンゴル族のオボーだけを注目してきたが、今後エウンキ族（鄂温克族）、ダウール族（達斡尔族）、ユゲル族（裕固族）など東北・北方民族の中で伝承されてきたオボーに対しても注目し、展開しなければならない。これらの民族のオボーは元来モンゴルの影響を受けて生じたか、どういうルートで伝わって、どのような変化が生じたかなどについても考察し、他のモンゴル語系部族においてもオボーが見られているかについて注目すべきだと思う。

とりわけ、オボーの長い歴史と、それに対する短い研究史が顕著な対照となっている。そのため、いままで纏まった人類学的民族誌資料は集成されていないし、オボーの性質を全体的に明らかにした著作も生まれていなく、既に掲載されている論文もばらばらになっているのである。これは研究グループの力不足と分散な状態、資料収集、アプローチなどに制限が見られるからである。したがって、今後の課題は記録、録音、撮影などの調査方法を合わせて、各地域で大規模な調査を行ない、オボーに関する資料を収集することである。それに基づく研究者の学術的なまとめが必要であると思っている。

ⁱ 陳崗龍 2007 「オボー研究の方法と資料準備」

『中国スウルデ文化、オボー文化、馬文化』のシンポジウムでの口頭発表

ⁱⁱ 後藤富雄 1956 「モンゴル族におけるオボーの崇拜—その文化における諸機能」『民俗学研究』

ⁱⁱⁱ 秋葉隆 1937 「朝鮮の民俗に就いて—特に満蒙民族との比較」ソウル

^{iv} 秋葉隆 1941 「オボーとオボー祭り」『満蒙の民族と宗教』大阪屋号書店

^v 前掲注1

^{vi} 江上波夫 1948 「匈奴の祭祀」『ユーラシア古代北方文化』 全国書房

^{vii} ドルジ・バンザロフ 1846 「黒教或ひは蒙古人に於けるシャーマン教」

内蒙古大学歴史系蒙古史研究室編『蒙古史研究参考資料』第17輯

^{viii} [英] Alpollard-urquhart文、劉迪南訳 2001 『西北民族研究』（第2期）

^{ix} ロブサンチョイダン 1981 『蒙古風俗鑑』 内蒙古人民出版社

^x アルビンバヤル、ソナム 2001 「鄂托克敖包」 内蒙古人民出版社

^{xi} ラ・アムルメンド 2004 「ウジュムチンオボー祭祀」 内蒙古人民出版社

^{xii} 劉文鎖、王磊合 2006 「オボー祭祀の起源」『西域研究』第2期

^{xiii} ソルタイ 1994 「オボーの形成及び変遷について」『内蒙古社会科学』第3期

^{xiv} 仁洪生 1999 「モンゴル族のオボー習俗の文化淵源における考察」『青海民族研究』第3期

^{xv} 金剛 1999 「オボー祭祀の実質について」『内蒙古社会科学』第2期

^{xvi} ナムジラドルジ 1987 「モンゴル族のオボー祭祀について」『内蒙古社会科学』第3期

^{xvii} 波・少布 1990 「黒竜江流域のモンゴルにおけるオボー考察」『黒竜江民俗刊』第4期

^{xviii} 波・少布 1990 「嫩江流域のモンゴルにおけるオボー考察」『黒竜江民俗刊』第4期

- xix 何日莫其、呉宝柱 1999 「東部モンゴル地区の記念オボ」『黒竜江民俗刊』第4期
 xx 呉金鳳 1998 「モンゴル貞十三オボー及びそれに見られる民族性特徴」『黒竜江民俗刊』第4期
 xxi 巴・巴圖 2001 「喀刺烏蘇土尔扈特オボー習俗の考察」『蒙古語言文学』第4期
 xxii 其日滿圖 1999 「ウーシン旗の十三オボー及び周囲のジャングル」『内蒙古社会科学』第2期
 xxiii 納琴 2004 「オボー信仰の役割及び伝説—珠拉沁村のフィールド調査研究」『民族芸能』第4期
 xxiv エルヘムバラル 2004 「ホルチン（科爾沁）オボー崇拜習俗及びその起源」『蒙古言語』第3期
 xxv 馬昌儀 1993 「オボーと瑪尼堆の象徴の比較研究」『黒竜江民俗刊』第3期
 xxvi 荊莉、金錦子 1996 「オボーと社郎堂の比較研究」『民間文化旅行雑誌』第1期
 xxvii 拉巴次旦 2006 「瑪尼堆とオボーの起源について」『チベット大学学報』第3期
 xxviii 陳緯 1994 「チベット族のオボー祭祀について」『青海民族学院学報』第3期
 xxix 波・少布 2002 「モンゴル族の女性オボーの特徴」『内蒙古社会科学』第6期
 xxx 何日莫其 2000 「モンゴル族の婦女オボーの源を探って」『内蒙古社会科学』第3期
 xxxi 吉田順一 「近現代内モンゴル東部地区のオボーの歴史」
 早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター編
 『アジア地域文化学の構築—21世紀COEプログラム研究集成—』



ウーシン旗ダムザン・オボー（ナランビリゲ撮影）